

## 岡山県知事賞

### 私の姉

総社市立総社東中学校

一年生 高谷 日内里

私には大学三年生の姉がいる。難聴の障害をもち、人工内耳という機械と補聴器を必要とする生活を送っている。コロナがはやっている今、耳の聞こえにくい姉にとって不便なことはいっぱいだ。

まず一つ目はオンライン授業だ。姉はパソコンから出てくる声がほとんど聞こえていない。その日の授業で使う資料をプリントアウトして、それを見ながら授業を聞くのが精一杯だ。夏休み明けまでだったオンライン授業はコロナが広がってきたため、さらに延長されるようだ。

もう一つはマスクだ。耳の聞こえる私たちにとって、マスクは暑いだけのものである。だが、姉にとっては暑いだけでなく、

口元を読み取ることができないという不便さも加わる。そうとはいえ、マスクをはずしての会話はよくない。しかし、なるべく姉の聞き返しがないように、家族間ではマスクをつけての会話はしない。なぜなら、感染リスクは高まるが、聞き返しを減らすことによって姉のストレスを軽減させられると考えたからだ。

姉からバイト先での辛い経験をたくさん聞いた。ある年配の男性客の接客で、オーダーのやり取り中、姉が聞き返しをしたときの一言である。

「お前、日本語わからんのんか！」

もちろんその客は姉が難聴者だとは知らなかったが、たった一回の聞き返してこの発言はありえない。好きで障害を持っていくわけではない姉だからこそ、傷ついたに違いない。そんなことがバイト先では日常茶飯事だ。それでも姉は心のためこまぎらず、全てを私たち家族に話してくれるから安心だ。うまく気持ちをコントロールできていく姉のことを、私は心が強い人だと思っている。

姉の障害に一番関わり、向き合ってきたのは母だ。姉は三歳からろう学校に通っていた。母は毎日朝早くから家を出て、遠

くまで送り迎えと付きそいをしていたらしい。我が家は姉と五歳下の兄とさらに三歳下の私の三人兄弟だ。母は兄がお腹にいて大変だったときも、そして出産をしたときも、その生活を変えろことはなかったと言う。

ろう学校で主に姉がやっていたことは、発音練習である。耳から入ってこない音を口に出すために、ストローや羽根、紙やコップを使って訓練したそうだ。そして、絵日記を書くことによつて、ひらがなを覚え、伝える、表現することを身につけた。こつこつと発音練習をした姉は、難聴者とは思えないほどきれいな発音で話すことができる。周りにいる私達は、手話を使わなくてもいい。

家族や周りができることは、姉にとって不快な音をたてないことや、聴きとりやすい声で会話をすることである。テレビは必ず字幕をつけて観る。字幕に慣れると、私も自然と漢字に目が行き、習っていない漢字が身につけている気がする。姉がいるからこその習慣だ。

障害者としての姉を意識したのは、私が小学校高学年の頃である。普通に話し、普通に生活をする姉の姿は、私にとって障害者ではなかった。今思えば、普通の人の何十倍も何百倍も努

カしてきたのがわかる。数えきれないくらい辛いことを経験してきただろう。かわいそうと思うし、悲しい気持ちになる。でも姉は強い。泣くこともあるし、怒ることもある。笑ったりふざけたりしながら、いろいろな気持ちをリセットしているのだろうか。

家族に障害者である姉がいることによつて、私たち家族は障害者に対しての考え方や接し方に自信がある。偏見を持ったり、差別的な目で見たりすることはない。人として、自然に優しい気持ちになれるということは幸せなことだと思う。

残念ながら、私には耳の聞こえない人の気持ちは正直分からない。それでも、姉と生活していく中で難聴者の日常を目の当たりにし、姉を手助けするタイミングや、どんなことに困っているかが分かるようになってきた。難聴の友達への接し方の参考にもなるのだ。

日々がんばっている姉の姿をばげみに、私はこれからもどんなことにも挑戦していきたい。そして、引き続き姉のサポートをしていきたい。